

情報構造と派生目的語制約

Information Structure and the Derived Object Constraint

現 影 秀 昭

GEN'EY, Hideaki

In this paper I argue that Postal's (1974) Derived Object Constraint (DOC) should be analyzed in terms of information structure as well as the discourse subordinate relations. My description is based on that of López (2009). I also have recourse to Asher and Vieu's (2005) list of discourse relations. I show that the information structure is transparent in the syntax of a class of English accusative with infinitive construction subject to DOC, where a raised DP has to be dislocated. Postal (1974) does not present us with contexts in which relevant sentences would be used, and thus it is impossible to evaluate his claim as it is. However, I place relevant examples in appropriate contexts to evidence my analysis.

1. 序

1.1. 繰り上げ構文に現れる動詞と談話・情報構造のかかわり

本論考では次の様な英語の文の情報構造を問題とする。

- (1)a. *I estimated your sister to weigh 250 pounds. (Postal (1974: 298))
b. Your sister, I estimated to weigh 250 pounds. (Postal (1974: 301))
(2)a. *He alleged Melvin to have been a traitor.
b. Melvin, he alleged to have been a traitor. (cf. Postal (1974: 304))

(1a)と(1b)の真理条件は同じであるが、異なる種類の談話である。Postal(1974)は、(1a)は、(1b)のようにestimateが不定詞付対格で

は通常数量を表わさない指示表現や照応形が対格に現われることを阻止する、と言う。従って(1a)のmy sisterをthemやmyselfに変えても非文法的であるが、話題化を適用すれば救われる、とPostal(1974)は述べている。しかし、Postal(1974)は、話題化という情報構造の概念を用いながら、情報構造自体には言及せずに、allege類動詞の不定詞付対格構文において主節の目的語に繰り上がった不定詞補文の主語(派生目的語)は空代名詞でなくてはならないという制約(Derived Object Constraint; DOC)をたてている。これはしかし指定にすぎないし、これですべて説明できたとは思われない。ただしDOCは相対的概念で、believe類動詞とallege類動詞の間には中間体を認める連続体を構成しうるが、これはまた別の話である。英語話者なら、(1b)は、(冗

キーワード: 情報構造、派生目的語制約、話題化、焦点、言語類型論

Key words : Accusative with Infinitive, the Derived Object Constraint, Topic, Focus, Typology

談交じりに) Well, I think a girl who weighs 250 pounds is eligible for him. ということばに対する受け答えとして、(2b)は人の噂話をしている、They thought Jonathan and Melvin were both innocent victims of the terrorist attack. However…と言った後に続けると良い、と考えるであろう。一方、(1a)および(2a)は、これらの「文脈」となる先行談話に照らして不適切ということも言えよう。本論考では、DOCの現象の説明においては、この様な情報構造の観点を取り入れる必要があることを指摘する。

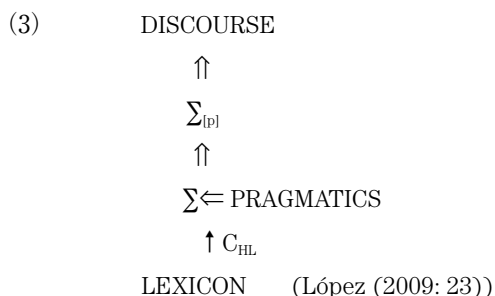
本論考の目的は、ある種の繰り上げ構文で、派生目的語制約を避けるために、話題化、左方転移あるいは右方転移される言語現象についてのPostal(1974)の観察を、López(2009)の「情報構造の派生統語論」の観点から分析しなおすことにある。なお、Postal(1974)をはじめとするDOCに関する先行研究においては、転移した構造の置かれた文脈が与えられていない。そこで本論考では、情報構造の観点から、これらの統語構造を分析するにあたって、「文脈」を付け加えた (cf. Lambrecht (1994: 193))。

転移(dislocation)は文内部の構造で起る。狭い意味の文法である。その構造の良し悪しを決めるのに談話の上のレベルの要因が関係している。文の境界をまたいだ談話でも構造上の非対称性が働いている。「従属」の関係の時だけ転移が可能になる。López (2009)は主として南ロマンス語 (特に、統語構造が情報構造に忠実であるとされるCatalan語)を言語資料に用いて実証的な研究をおこなっているが、本論考では繰り上げ動詞とDOCの違反を避けるための話題化、左方移動、右方移動について記述に重点をおいて、その構造

の良し悪しをきめるのに談話の上のレベルの要因が働いていることを示すのがその目的である。つまり、英語の (特にallege類動詞の)不定詞付き対格も先行詞を含む上位文と、構造上非対称の関係にある文の内部にあるときは、対格名詞句に、先行詞と (弱く) 照応的であることを示す [-novelty] と対比焦点であることを示す [+contrast] という語用論の素性が与えられ、焦点やトピックとなる要素として転移あるいは前置しなくてはならないという点で情報構造を反映しやすい、という仮説を提案する。

なお本論考では「転移(dislocation)」は話題化や左方転移について、「前置(fronting)」は焦点要素を節のはじめに移動する操作について用いる (N.B. López (2009: 8, 26))。

2. López (2009) のモデルの概要



以下に、Chomsky(1995)以降のミニマリスト・プログラムの枠組みに基づく、López (2009: 22-23)の概要を紹介しておく。情報構造とは文を談話に組み入れるのに関係する文文法の側面である。ある種の文の統語形はある種の談話に適切に組み入れられるが、他の文はそれができない。統語論は結合操作によって語を組み合わせることで構造化してゆく計算モジュールである (CHL = 人間言語の計算システム(Chomsky (1995)))。「談話」とは文を組み合わせることで談話表示構造にする計算モ

ジュールである(Kamp and Reydel (1993))。さらに、統語的な構築物を談話構造に挿入することに関係する素性を、ある位置にある構成素に付与する「語用論」というモジュールを仮定する。統語的構築物の「情報構造」 Σ は、 $\Sigma_{[p]}$ である。 $\Sigma_{[p]}$ は語用論によって与えられた素性を持ち、従って談話構造に写像する準備が出来た、同じ統語的構築物である。情報構造に対する主流派の語用論のアプローチでは、「話者の意図」、「聞き手が知っていることに関する話者の仮定」、「話者が聞き手に注意を払って欲しいと思っていること」等々に言及する。この立場に立てば、情報構造とは統語構造を話者のこころの状態に写像する計算にかかわることになる。

2.1. CLLD, CLRD, FF, HTLDと話題化,左方転移

López (2009: 2) の言語データは南ロマンス語で、とくに表層構造が情報構造に忠実であるCatalan語が重要である。本論考と関連するのは、情報構造の違いによって、構成素が転移し、普通の語順からずれる(以下の)現象である。(4)はCatalan語の普通の語順で、文全体が普通の焦点(新情報)である。

(4) Regular Focus/Rheme

Trobo molt maca aquesta samarreta.
 find. 1st very pretty this T-shirt
 'I find this T-shirt very pretty.'

(López (2009: 24))

これには4つの変異形がある。

(5) a. Focus Fronting (FF)

AQUESTA SAMARRETA trobo molt maca
 this T-shirt find.1st very pretty

b. Clitic Left Dislocation (CLLD)

Aquesta samarreta la trobo molt maca.

this T-shirt Clacc find.1st very pretty
 c. Clitic Right Dislocation (CLRD)
 La trobo molt maca, aquesta samarreta.
 Clacc find.1st very pretty this T-shirt

(López (2009: 24))

(6) Hanging Topic Left Dislocation (HTLD)

Aquesta noia, a ella si que no
 la vull veure mai més.
 this girl ACC her indeed that NEG
 Clacc want.1st see.inf never more
 'This girl, I do not want to see her again.'

(López (2009: 26))

FFでは、文頭に出されたものが対比焦点(contrastive)で、残りは焦点ではない。CLLDとCLRDは話題(topic)であると普通分析される(López (2009: 24))。

López (2009:11) の分析の要点は、以下の様になる。まずRizzi(1997)と同様に、節の構造としてCPをFinte PhraseとForce Phraseに分割する(Forceは「発話の力」を表し「補文標識」に、Fin(ite)は定形に相当する。またFin⁰なら不定詞に相当する)。

(7) [_{ForceP} Force [_{FinP} Fin [_{TP} T [_{VP} v [_{VP} V]]]]]

(López (2009: 11))

フェーズは、解釈システムとのインターフェースをなし、フェーズ主要部の補部をChomsky (2000)以降の枠組みに基づいて(解釈システムに)「転送」する。フェーズの主要部はvとFinである(López (2009:16))。

さらにLópez(2009)は、①先行詞を義務的にとり、②しかも先行詞になりうるもので一番近いものを取り、③先行詞と依存要素の間で談話構造上の非対称性がないといけない、という3つの条件が揃う「強く」照応的な([+a(naphoric)])要素が、CLLDやCLRDで転移する、と論じている。またCLLDは、wh

句と同様に、節の左端まで出される（要素に対比焦点としてFinPまで繰り上がって [+c(contrast)] という素性が語用論の規則で与えられる）、とLópez(2009:9)はいう。英語の話題化と左方転移は、CLLDとHTLDに対応する（López(2009: 7), Van Riemsdijk(1997)）。ただしLópez(2009: 7)は、その分析を南ロマンス語以外の言語には適用しないと明言しているが、普遍文法の観点から、他の言語も類似の特性を持つはずであると述べている。本論考の目的は、記述に重点を置いて、López(2009)の分析を、英語にも適用することにある。

3. 英語の転移—情報構造から捉えなおしたDOC

このセクションでは、allege類動詞の繰上げ構文とDOC効果が、[±a] あるいは、それよりよりも緩い[±novelty]と[±c]という語用論の素性と、Asher and Vieu (2005: 596)の談話関係を考慮に入れた説明が可能であるかどうか、およびVillalba(2000)の部分集合、超集合、集合-構成員、全体/部分というカテゴリーのいずれかに（Lambrecht(1994)で言うところの）リンクされない話題化が当てはまるかどうか、について検証する。

3.1. 談話関係とDOCと話題化 (1)

まず、次の例を見てみよう。

- (8) The husband at first contended that his father-in-law had incited his daughter against him – just as he alleged him to have done in the case of his brother …

[Ahron Layish, *Marriage, Divorce, and Succession in the Duze Family*, 1982.]

2番目の節のhe allege him to VPの主語は

The husbandを指し、目的語のhimはhis father-in-lawを先行詞に取っている。López(2009: 48)に引用されているAsher and Vieu(2005: 596)の談話構造（談話関係）に照らして見ると、先行詞を含む節と代名詞を含む節は「等位（coordination）」の関係にあり、両者は「平行（parallel）」である、といえる。2つの節をつなぐ接続詞はjust as ~であることもそれを裏付けている。allege繰上げ構文で主節の目的語に繰り上げられた（とされる）DP(him)は、弱い代名詞である。弱い代名詞はLópez(2009: 53)によれば「弱い照応形」であり、談話における構造上の非対称性とはわからない。非対称的な構造とは、文と文の間の関係（談話関係）が、「従属（subordination）」であって、「等位（coordination）」ではない、ということである（Asher and Vieu(2005: 596)）。López(2009: 47ff.)によれば、（要素の）転移の条件は「談話上の従属」関係である。

上記のallege繰上げ構文を見ると1. The husband ... で始まる文と、2. just as he alleged him ... ではじまる文は「等位」された文である（正確には「平行」の談話関係にある）。従って、（2つ目の文の）himに話題化を適用して左方移動すると、談話関係における「構造上の非対称性」条件に合わないことになる。従って、次の様にhimを左方移動することは不適切である：

- (9) The husband at first contended that his father-in-law had incited his daughter against him – #just as, him, he alleged to have done in the case of his brother ...

事実、実例では、himは元位置に留まっている。この（allege類動詞の）不定詞付き対格に現れる（弱い）対格代名詞についてももう少し掘り下げてみよう。López(2009: 2-3)は、

情報構造上の重要な概念として（「トピック（既知情報）」や「焦点（wh疑問に対する答えに当たる）」の代わりに）、談話上の「照応」と「対照」を提案し、対応する語用論上の素性[±a(naphor)]と[±c(contrast)]が語用論の規則によって、話題化や左方転移する要素（が現れる構造上の位置）に与えられる、と仮定する。（8）の例で、転移しない代名詞は強い照応性を示す語用論の素性 [+a (naphor)] を持たない（López (2009: 66, 68-70)）。従って、allege pronoun to-VPのpronounの位置は、非照応的、非対称的という概念に対応する素性 [-a, -c] が語用論の規則によって各フェーズの終わりに与えられる。その理由を情報構造の面から考えてみたい。代名詞は焦点になることもあるが、一般に（Schwarzchildその他によれば）代名詞は内在的に既知である、ということである（López (2009 :66, 67)）。代名詞は、本来的に旧情報である、と一般に仮定されている。旧情報は「談話関係の構造上の非対称性」を要さない点を除けば「照応的」あるということと類似している（cf. López (2009: 66-67), Schwarzchild (1999: 145)）。従って、DP allege pronoun to-VPに現れる代名詞（pronoun）も、既知（旧情報）であり、（先行詞との間に構造上の非対称性を持たない）「弱い照応性」を示している、と仮定しても問題はない。本論考では、英語の弱い照応形については[-a]あるいは[-novelty]という素性を持つと、仮定しておく。また[-novelty]要素は転移しない、と仮定してみよう。López(2009: 83)は、英語では、Catalan語の様に[+a]をもらうためにSpec, v^h（DPが）移動する証拠はない、という。López(2009: 83)は、英語の文法には[+a]が入っておらず、代わりに、もう少し緩い[±novelty]という

概念が符号化されているのかもしれない、と述べているからである。またLópez(2009: 70)は、Catalan語で転移する弱い代名詞は[+a]であるが、英語では弱い代名詞にアクセントがないことがそれに対応する、とも指摘している。

さらにallege類の繰上げ構文の繰り上げられたDPは、Bošković (1997: 59) によれば「接辞」、Lasnik(2008)によれば「弱い代名詞」である、という指摘がある。これらの代名詞はアクセントを与えられていない代名詞のことであるはずである。ただしBošković(1997: 59) やLasnik(2008) が情報構造を考慮していない、という点でが問題である。情報構造を考慮すると次の様な主張が可能である。アクセントのない代名詞は、照応形に関する条項のうち、(i)先行詞と義務的な依存関係があり、(ii)照応形が一番近い先行詞に言及しなくてはならない、という条項を満たす、ということを示している（López(2009: 68) が例示している。allege類動詞の繰上げ構文についても文脈を与えて、例示すると以下の様になる。

(10) Context: Yesterday Maria and Melvin
were upset at the report. Did you allege
Melvin to be a pimp?

- Yes, I alleged him to be a pimp.

- #No, I alleged her to be a pimp.

himはアクセントのない代名詞であるので、一番近い先行詞Melvinに言及しなくてはならない。この言語事実もまたPostal(1974) のDOCが、情報構造の問題であることを示している。

3.2. 談話関係とDOCと話題化 (2)

allege類動詞の一つであるdiscoverという動詞の繰上げ構文で話題化が適用された実例

を見てみよう。

(11) Bruno regarded him curiously. “Oh, you mean these footprints! Well, Miss Smith saw at once that old woman [Mrs. Hatter] was dead, and she thought Louisa was dead, too. So she screamed, being a woman after all, and her screams aroused Barbara and Conrad Hatter. They ran in, took in the situation at a glance, and without touching anything —”

“You’re positive of that?”

“Well, they were all checks on each other, so we’ve got to believe them. — Without touching anything they ascertained that Mrs. Hatter was dead. She was already stiff, in fact. Louisa, however, they discovered to be merely unconscious; they carried her from this room into Miss Smith’s.

[Ellery Queen (1933) *Tragedy of Y*, p.68, my emphasis]

上記の例は長い談話であるが、後述する談話構造が遵守される限り、先行詞と転移要素が隣接する必要がないということを示したLópez(2009:51)の観察を受け入れることにしよう。(下線部の)文に番号を振って、1. Well, Miss Smith saw at once that old woman [Mrs. Hatter] was dead, and she thought Louisa was dead, too.と6. Without touching anything they ascertained that Mrs. Hatter was dead. 7. She was already stiff, in fact. 8. Louisa, however, they discovered to be merely unconsciousだけに着目してみる(なお途中に介在する談話2-5は等位関係(特に話をつなげていく「語り(narration)」の談話機能でリンクされ、「等位」関係にある)。6と7は「語り(naration)」とい

う談話機能で結ばれ、「等位(coordination)」の関係にある。文の境界をまたいで、下線の6-8の文は、1番目の文を上位文として、それをさらに「詳しく述べている(elaboration)」ので両者の間に従属関係が成立している。つまり、はじめはMrs. HatterとLouisaの両方が死んでいると思っていたら、Louisaの方はまだ息があったという形で、先行詞(Louisa)を含む先行談話を、さらに詳しく述べている(ELABORATION)のであるから従属(SUBORDINATION)の関係が成立し、話題化(による左方転移/CLLD)の条件を満たしていることになる。また隣接する節(内の要素)同士は「対照(contrast)」の関係にある(片方は死亡し、他方は生存が確認された)。また6. Mrs. Hatter was dead. 7. She was already stiff, in fact.と8. Louisa, however, they discovered to be merely unconsciousは、Mrs. HatterとLouisaを含む対称的な対比(symmetric contrast)を確立している。これらは「等位」の文連続である。

もう少し一般化して言うと以下の様になる。話題化によって左に動かされた要素を含む節は、もう一つの要素を含む隣接する節と対称的な対比関係にある。そしてこの2つの節の間に成り立つ談話関係は「等位」である。この2つの節は先行詞を含む文とは従属関係にある。これをLópez(2009: 50-51)のCatalan語のCLLDの典型的な配列と対比すると興味深い類似点が浮かび上がってくる。以下、そのことを詳しく述べることにする。

本論考で考察した話題化(TOPICALIZATION)の実例の談話構造は、間に介在する命題が複数あるが、英語の話題化要素を含む文/命題Π₆TOPICALIZATIONとそれと「対照(Contrast)」され「等位(Coordiantion)」の関係にあるも

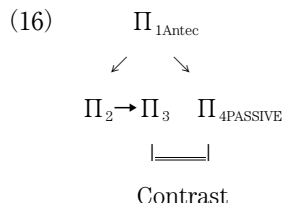
DEATH IN WACO STREETS. THERE ARE TWO MORE WIDOWS AND EIGHT MORE ORPHANS. (中略)

To trace the movements of ② the two men during Friday afternoon appears easy at first, but as the investigator proceeds in his search for information he meets conflicting statements. ③ Tom Davis left his office on South Fourth Street, No. 111, about 5 o'clock or a few minutes later. ④ Brann, accompanied by W. H. Ward, his business manager, is alleged to have been standing at the corner of Fourth and Franklin Streets as Davis passed to the postoffice corner, en route to the transfer stables.

[THE COMPLETE WORKS OF BRANN THE ICONOCLAST VOLUME XII, my underline]

これは路上で起きたDavisとBrannという2人の男の決闘事件を報じる新聞記事の抜粋である。見出しで既に、DavisとBrannの名前が挙がり、その後the two menで受けて、次に再びDavisとBrannがトピックとして再導入されている。A CHAPTER WRITTEN IN THE LIFE BLOOD OF W. C. BRANN AND THOS. E. DAVIS.ではじまる見出し①に対して、③Tom Davis left his office on South Fourth Street, No. 111, about 5 o'clock or a few minutes later.および④Brann, accompanied by W. H. Ward, his business manager, is alleged to have been standing at the corner of Fourth and Franklin Streets…という2つの文は「従属」の談話関係にある（途中の②the two menを含む文は、①を「詳述 (elaboration)」する「詳述 (elaboration)」の関係にある）。Davisに

ついでに記述③は能動態で、Brannについての記述④は受動態で書かれ、DavisとBrannの間の「(対比的に)対照」が確立され、2つの文は「等位」の談話関係にある。さらに③と④は、先行詞を含む見出し①に従属している。



英語には情報構造に影響された語順（新情報よりもアクセスが容易なので旧情報／トピックが前に出る）の選択肢として話題化と受動態がある。上記の例で、話題化（Brann, they alleged to-VP）ではなく、受動態を選択したのは、動作主を伏せる意図があるため、と思われる。

繰上げ動詞の補文主語を含むPPが（旧情報として）A'移動する場合もある。トピック／旧情報はアクセスしやすいので前に出するためである。以下の例ではトピック／旧情報としてのPP(= To them)が「A'移動」して、節の主題層の外にある演算子の位置に転移している。ただし、このA'移動は制限された統語操作であり、文脈が引き金にならないと発動されない。

(17) *She holds up another book to show Van Goh's "Starry Night." The students move in closer to look at it.*
 Katherine: People didn't understand. To them, it seemed childlike and crude.
 [Mona Lisa Smile, Screenplay, p. 116, my underline]

なお、先行詞を含む1番目の文と、照応形を含む2番目の文は、「従属」の談話関係にある。なぜなら、2番目の文は「説明(explanation)」

に当たるからである (People didn't understand. Because, to them, it seemed childlike and crude. のように because を補うと良く分かる)。

次の例は 2 番目の文が 1 番目の文を「詳述 (elaboration)」するので談話従属が成り立っている (前の談話に、これ以上付け加えることがない、と言うことも詳述の一種である)。従って、トピック／旧情報としての PP (= To that) が「A'移動」して、節の主題層の外にある演算子の位置に転移することが可能である。

(18) Gromyko: Premier Khrushchev's statement of September thirteen remains the position of the Soviet government. To that, I have nothing to add.
[Thirteen Days™, Screenplay, p. 56, my underline]

なお英語のデータに基づいて、焦点と強勢の相関は薄い、ということを示している。López (2009: 76-83) が示している。確かに焦点化された要素はどこかで文強勢を示さなくてはならないが、焦点の構造から強勢の位置や、強勢の位置から焦点の構造を予測することは不可能であるように見える、と López (2009: 76) は指摘している。このことは焦点が、本当は、文法分析のカテゴリーではないという、López (2009: 73) の結論を補強するものである、という。本論考は、この López (2009: 76ff.) の分析を受け入れることにする。

また、Postal (1974) が、DOC を逃れるため再帰代名詞 oneself が話題化される例を、文脈なしで、挙げている。

- (19) a. Himself, Bob estimated to be worth over 300,000 escudos.
b. Herself, Mary estimated to be five feet tall. (Postal (1974: 304))

- c. *Bob estimated himself to be worth over 300,000 escudos.
d. *Mary estimated herself to be five feet tall. (Postal (1974: 303))

López (2009) は再帰形 oneself の転移については扱っていない。再帰代名詞 oneself は、必ず先行詞がなくてはならず、その先行詞は一番近くにあるもので、先行詞と再帰代名詞の間で構造上の非対称性がないといけない、という点で「強く」照応的 ([+a]) である可能性が高い。また上記の例では話題化しているので、左端 (left periphery) へ移動しているので [+c(contrast)] である。Postal (1974: 304) は文脈を与えていないので、その主張をそのままで評価することはできない。文脈を与えると以下のようになるであろう。

- (20) Context: In Bob's estimation, his colleagues were worth well below 100,000 escudos. Do you think that is fair?
- No. The reason is this. Himself, Bob estimated to be worth over 300,000 escudos.

3.4. DOCの違反と情報構造

同じ allege 類動詞の繰上げ構文でも、情報構造とのかかわり方によって、DOC 効果が見られない場合もあり得ることが予測される。本論考では、その様な実例として次の小説の一節を挙げておく。discover は Postal (1974: 305) で allege 類動詞の 1 つとしてリストアップされている。

- (21) "Have you any theory concerning the attempted poisoning of Luisa Campion and the murder of Mrs. Hatter, Doctor?"
"I should not be surprised if you discovered the murderer and poisoner to

be any one of the Hatter family,” Merriam said in a toneless voice.

[Ellery Queen (1933) *The Tragedy of Y*, 352, my underline]

下線部は、通常、DOCの違反になるとされる構造である。次の例と対照するとよく分かる。

(22)*John wagered the students to know French. (Bošković (1997: 59))

Bošković (1997: 59)は、「埋め込み文の主語は格照合されない位置であり、複雑で紛れもないXP要素（であるこの主語）は主節動詞wagerに編入されることもできず（格フィルターで）排除される」という説明を与えている（cf. Pesetzky (1992)）。従ってdiscover the murder and poisoner to be DPの実例は、格理論に基づく説明にとっては（その場しのぎの指定をしない限り）謎ということになる。

さらにPostal (1974: 305)でallege類動詞の一つとされるfeelについても、DOCに違反する次の様な実例がある。Laneという素人探偵が事件の謎解きを警部補に披露する場面である。Jackieは容疑者の一人である。

(23) Before I knew that the plot was York's, at the time when I felt Jackie to be the criminal, I said to myself: 'It was Jackie, who, seemingly by accident, forestalled the poisoning attempt in the egg-nog incident.'

[Ellery Queen (1933) *The Tragedy of Y*, 352, my underline]

上記の例の下線部は、通常、DOCの違反になるとされる構造(22)と同じ構造である。Bošković (1997: 52)に従えば補文の主語が格照合されないので排除されるはずの構造である。

Asher and Vieu (2005: 596) および López (2009: 47ff.)に従えば、CLLDの前提条件は談話従属である。英語でCLLDに対応するのは話題化である(López (2009: 7))。情報構造をDOCに優先すると仮定して上記の例の下線部の文は、先行する文と「従属」の関係にないので、(Jackieを節の冒頭に出す)話題化が適用できないために、DOCの違反が引き起こされ、しかしなおかつ適格である、という説明を本論考では提案する。Before I knew that the plot was York'sを文1とし、at the time when I felt Jackie to be the criminalを文2とすると、両者は「等位」の関係にある。しかも文2は、文1と同時点を表わすので「並行(parallel)」関係にあるので構造上の非対称性成り立たない、といえる。従って、この場合は、たとえDOCに適っていても、情報構造上は文2で話題化を適用する方が不適格となる。このことは(24)に示してある。この様な視点が先行研究(Postal (1974, 1993), Lasnik (2008))では欠けていたことが問題であることを本論考では指摘する。

- (24) 1. Before I knew that the plot was York's,
2. #at the time when Jackie, I felt to be the criminal,
3. I said to myself: 'It was Jackie, who, seemingly by accident, forestalled the poisoning attempt in the egg-nog incident.'

また、Jackieは容疑者の一人として話し手と聞き手にとって「既知(given)」である点も留意すべきである。固有名詞が既知の情報となる例は他にもある。例えば、次のやりとりでSpencerはBettyの夫であり、Mrs. Warren (Bettyの母)の義理の息子である。

(25) MRS. WARREN: Spencer won't mind?

BETTY: Spencer won't notice. He's in New York again. Working.

[*Mona Lisa Smile*, Screenplay, P.164]

Reinhart (2006: 144)は“when a DP (or other constituent) denotes an entity already in the context set...A denotation of this type is often found with definite DPs..., but is most noticeable with pronouns” (DP(ないし他の要素)が、文脈の集合の中に既にあるものを指示する時は…このタイプの指示物は定名詞の形をとることが多い…しかし代名詞となることが一番多い)と述べている (López (2009: 82)). you discovered the murderer and poisoner to be any one of the Hatter family における the murderer and poisonerもI felt Jackie to be the criminalにおけるJackieも文脈の集合にすでにあるもの (entity) である (the murderer and poisonerは事件が起きた後では既知の要素になる)。本来なら代名詞で受けるべき要素である。談話-構造上の非対称性が成り立たない上に、情報構造上、代名詞と同じ扱いとなるので、(23)はDOCを免れるとも言える。

また、次の例はwh疑問文にするとDOCの違反が回避されることを示す例としてPostal (1974: 305)が挙げているものである。

(26) Who did they allege to be a pimp?

(Postal (1974: 305))

しかし、情報構造の観点から見直してみると、これは「焦点」の問題と係わる現象である。

焦点とは前の談話で立てられた変数の値を決めるものである (Jackendoff (1972), López (2009: 34))。従って、上記の例は次の様なやりとりの中で捉えるべき現象である。

(27) Context: Who did they allege to be a

pimp? [x | they allege x to be a pimp]

A₁: Melvin. [x = Melvin, 'Melvin' is focus]

A₂: Melvin, they allege to be a pimp.

A₃: *They allege Melvin to be a pimp.

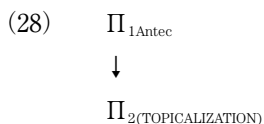
(cf. Postal (1974: 305))

このやりとりでは、wh疑問文によって立てられた談話が、その情報の一部を未定のままにしている。これをxで表示してある。「焦点」は、答え(A)の中で変数の値を決める部分である。

この問と答えのペアで、答えA₃: *They allege Melvin to be a pimp.が適切でないのは、DOCというよりもむしろ情報構造の問題になるのではないだろうか。

A₁とA₂は適切で、A₃は不適切である理由は、何であろうか。焦点となるDPだけが答えとなるA₁は問題ない、と思われる。A₂は、WH疑問文と共に「問-答のペア」の関係にあるので、Asher and Vieu (2005: 596)に従えば、問となる文と答えとなる文の間に「従属」の談話関係が成り立つ (López (2009: 47)という強い照応性の1部である構造上の非対称性が成り立っている)。話題化が適格であるための前提条件が「従属」であり、話題化された要素が先行する文に先行詞を見出す、と仮定してみよう。またこれがDOCの背後にある原理であると考えてみよう。すると、A₂は話題化が適用され適切であることになる。しかし、A₃は、第一に、(Melvinに) 話題化が適用され (左に出され) る条件が整っているにもかかわらず、話題化されないので不適切になるということがいえる。第二にA₃の不適切性は、allege不定詞付き対格の「対格DP (Melvin)」が「対比焦点 (contrastive focus)」であり、対比焦点要素は英語でも節の左端へ繰り上がる、と仮定すれば説明でき

る(cf. López (2009: 55))。英語の話題化は必ず(アクセントを与えられ)他の可能性との(潜在的な)対比を行う対照表現である(Hengevelt and Mackenzie (2008: 92))。従って、 A_2 は「他の人についてはa pimpだということは言いたてないが、Melvinについてはa pimpだと言いたてる」ということである。さらに対比焦点は、英語では、語用論の素性[-novelty, +c(contrast)]をもらうために繰り上がる、と仮定する。すると A_3 は[-novelty, +c(contrast)]の要素が、元位置に留まっていることが不適切になる原因である、と説明できる。なお、焦点となる要素は既知であってもよいので[-novelty]とする(N.B. López (2009: 78))。従って、Postal(1974)のDOC効果は、文の情報構造と係わる現象である、と言える。もう少し一般化して言うと、焦点とそうでないものの区別があって、それぞれの言語で表現の良し悪しに影響していく、という現在の言語で言える確かなことの反映が、allege不定詞付き対格構文にも見られるということである。その意味で英語の不定詞付き対格構文の表層構造は、定形節と比べて、情報構造にかなり忠実である、と言える(この点については、López (2009: 79)のCatalan語の分析と対照すると興味深い)。談話の構造を図で表わすと以下の様になる。垂直の矢印は「従属」を表わす。



転移は文内部の構造で起る。狭い意味の文法の現象である。その構造の良し悪しを決めるのに談話の上のレベルの要因が関係している。文の境界をまたいだ談話でも構造上の非対称性が働いている。「従属」の関係の時だ

け転移が可能になる。López(2009)は主としてCatalan語を言語資料に用いて実証的な研究をおこなっているが、本論考では英語の繰り上げ動詞とDOCの違反を避けるための話題化、左方移動、右方移動について記述に重点をおいて、その構造の良し悪しをきめるのに談話の上のレベルの要因が働いていることを示した。

3.5. リンクされないトピック (Lambrecht (1994))について

このセクションでは、不定詞以外の話題化についてLópez(2009)の観点から考察を加える。英語の話題化には、「リンクされないトピック」がある(Lambrecht(1994: 193))。これらは書き物では許されないが会話なら許される、という。トピックはそれが関連する節からカンマで区切られているが、このカンマは必ずしも休止を意味するわけではない、とLambrecht(1994: 193)はいう。

(29) Context: (Talking about how to grow flowers)

Tulips, you have to plant new bulbs every year? (Lambrecht (1994: 193))

(30) Context: (Lecturer in an introductory linguistics course)

Other languages, you don't just have straight tones like that.

(Lambrecht (1994: 193))

Lambrecht(1994: 193)は、これらの例において、トピックとなるDPが、(明示的であろうと空範疇であろうと)項と照応的にはリンクされていないと述べている。つまり、トピックDPは、それが結びつく節内の項ではありえないというわけである(Lambrecht (1994: 193))。

これらの例については、文脈内にある先行詞と話題化された要素、さらには節内の要素の間に、「部分集合」、「超集合」、「集合の構成員」、および「全体一部分」の関係が成り立っていることが特徴的である、と本論考では指摘しておく。文脈内にあるその先行詞とCLLDで左方転移されたの関係については、「部分集合」、「超集合」、「集合の構成員」、および「全体一部分」というカテゴリーに類別される関係が成り立つとLópez(2009: 42ff.)が、Villalba(2000)に基づいて論じている。上記の例については、単に文脈内にある先行詞と話題化要素だけでなく、節内にある話題化された要素と関連する要素という3者間の関係を考慮すべきである、というのが本論考の主張である。

(29)の例について考えてみよう。文脈にflowerがあり、話題化要素はtulipであるので、先行詞flowerが集合(set)で、話題化要素tulipが部分集合(sub-set)である。さらに、話題化要素tulipと、節内のbulbは、球根が成長してチューリップになっても、根元に球根は残っている、と考えると、「全体一部分」の関係が成り立っているといえる（あるいは、先行詞tulipとbulbは準同一(quasi-identical)といえるかもしれない)。いずれにしても、話題化は、適切な先行詞がないと排除されることになる。例えば、以下の例は不適切になると予測される(cf. López(2009: 45))。

(31)Context: (Talking about how to grow tulips)

#Flowers, you have to plant new bulbs every year? (Lambrecht (1994: 193))

(32)Context: (Talking about how to grow flowers)

#Bulbs, you have to plant new tulips every

year? (Lambrecht (1994: 193))

なおLópez(2009: 17)は、aboutness topicあるいはold information topicでは、転移の文法をうまく特徴付けられない、と述べている。従ってTopic Phraseは文法では不要であるという。focusという概念についても、同様に、それが元位置に留まるのか、それとも転移するのか、その振る舞いを予測することが出来ないとして排除している。代わりに、[+a], [+c] という素性で正確な予測が出来るという。本論考は、英語でもこれらの素性が関係するかどうかを検証しているわけであるが、「リンクされないトピック」の分析においては、[+a] という素性は無関係である。統語的にリンクされないトピックは、文レベルの要素ではなく(移動によらず)左端に基底生成される要素だからである、と本論考では考える。

4. 結論

本論考は、(評言は元位置に留まり、[+a]は転移しなくてはならない、という点で)統語構造が情報構造に忠実であるとされるCatalan語(およびイタリア語、スペイン語)についてのLópez(2009)の分析の道具立てが当てはまる程度に応じて、英語の(allege類動詞の)不定詞付き対格で、DOCの背後にある、と本論考で考える、文の境界をまたいだ談話で構造上の非対象性が働くことにより話題化や左方/右方転移が義務的に適用される現象も、統語構造が情報構造に忠実であることの現われである、という仮説を提案した。また不定詞以外にLambrecht(1994)のリンクされないトピックについても考察した。

謝辞

拙稿の執筆に際し、梶田優・上智大学名誉教授、今西典子・東京大学教授ならびに大津由紀雄・慶應義塾大学教授の東京言語研究所における講義より多くのものを得た。ここに記して感謝申し上げる次第である。

不備は言うまでもなく、すべて私の責任である。

参考文献（抄）

- Nicholas Asher, N. and Laure Vieu (2005) "Subordinating and Coordinating Discourse Relations," *Lingua* 115, 591-610.
- Bošković, Ž. (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, The MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, 89-156.
- Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," In Ken Hale: *A Life in Language* (ed.), M. Kenstowicz, MIT Press, Cambridge, 1-52.
- Kamp, H. and U. Reydel (1993) *From Logic to Discourse*, Kluwer, Dordrecht.
- Hengeveld, K. and L. Mackenzie (2008) *Functional Discourse Grammar: A Typologically-Based Theory of Language Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Lambrecht, K. (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lasnik, H. (2008) "On the Development of the Case Theory: Triumphs and Challenges," In *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud* (eds.), Robert Freidin, Carlos Otero and Maria Luisa Zubizarreta, The MIT Press, Cambridge, 17-39.
- López, L. (2009) *A Derivational Syntax for Information Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Pesetsky, D. (1992) *Zero Syntax, Vol.2, Ms.*, MIT, Cambridge.
- Postal, P. (1974) *On Raising: One Rule of English Grammar and Its Theoretical Implications*, The MIT Press, Cambridge.
- Postal, P. (1993) "Some Defective Paradigms," *Linguistic Inquiries*, 347-364.
- van Riemsdijk, H. (1997) "Left Dislocation," E. Anagnostopoulou, H. van Riemsdijk, and F. Zwarts (eds.), *Materials on Left Dislocation*, John Benjamin, Amsterdam, 1-12.
- Reinhart, T. (1981) "Pragmatics and Linguistics: An Analysis of Sentence Topics," *Philosophica* 27, 53-93.
- Rizzi, L. (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," Liliane Haegeman (ed.), *Elements of Grammar*, Kluwer, 281-337.
- Rizzi, L. (2004) *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 2*, Oxford University Press, Oxford.
- Schwarzschild, R. (1999) "Givenness, AvoidF and Other Constraints on the Placement of Accent," *Natural Language Semantics* 7, 141-177.
- Vallduví, E. (1992) *The Informational Component*, Garland, New York.
- Villalba, X. (2000) "The Syntax of Sentence Periphery," Ph.D. dissertation, Universitat Autònoma de Barcelona.